



2016(平成28)年
1月1日発行

Vol.65

ELCO RADAR

Ecological Life and Culture Organization

—— 公益社団法人 環境生活文化機構 季刊 エルコレダー ——



CONTENTS



新春
対談

兵庫県知事 井戸 敏三氏・本機構 広中 和歌子会長 1
日本の縮図・兵庫県が発信する先進モデル
— 一人と自然との共生が、新しい地域創生を生む —

- 《特別連載》 エシカル・プラネット4 エシカルの原点を、伝統工芸世界に見る
ファッションジャーナリスト 生駒 芳子氏 8
- 《連載》 環境を見つめる人々48 立教大学大学院 教授 萩原 なつ子氏 11
- 《連載》 エコ&ユニフォーム最前線16 ダイセン株式会社 記者 富永 周也氏 12
- 《会員紹介》 株式会社トベ商事 代表取締役社長 戸部 昇氏 13

兵庫県知事 井戸 敏三氏

新春
対談

本機構 広中 和歌子会長

日本の縮図・兵庫県が発信する先進モデル

— 人と自然との共生が、新しい地域創生を生む —

新春恒例、本機構の広中和歌子会長の全国知事対談のお相手は、兵庫県知事の井戸敏三氏です。井戸知事は、東京大学法学部卒業後、自治省に勤められ、阪神・淡路大震災後は、副知事・県知事として長年、兵庫県の復興に携わってこられました。大都市神戸をはじめ、山・川・海の豊かな自然に恵まれ、深い歴史と文化を持つ農山漁村など、その多様性から「日本の縮図」ともいわれる兵庫県。その目指す自然と人間の共生社会、地域創生の取り組みについて伺いました。

広中 兵庫県は日本の中心に位置し、明石の時刻を日本の標準時としていることでも有名です。それだけではなく、いろいろな意味で「日本の縮図」と言われますね。

井戸 地球の経度は、ご存知のようにイギリスのロンドンにあるグリニッジ天文台を0度としています。そこを基点として東経135度の子午線が明石市内を通りますので、明石の時刻を日本の標準時とされています。その意味で明石のある兵庫県は日本の中心と言えます。

それに加えて、兵庫県は非常に多様性に富んでいます。例えば神戸のような大都市から山間の小さな集落まであります。しかも平野があり山も盆地もあって、淡路島などの島もある。海も日本海と瀬戸内海、さらに淡路島を通して太平洋とも面しています。日本全体を構成する要素の多くが、兵庫県という一つの県の中に揃っているのです。

■大修復された姫路城

広中 今回の兵庫県の取材は、まず世界遺産の姫路城からスタートしました。(視察先1) 修復直後ということもありますが、本当に真っ白で鳥が美しく羽ばたいているようでした。

井戸 あの白さは400年前の姿そのものによみがえったのです。姫路城は白鷺城しらさぎとも呼ばれますが、その由来を、白鷺が城の周りを飛んでいるからだと思

っていた人が多かったのです。

それが今回の大修復で白漆喰を塗り直し、築城当時の城が再現されると、城そのものの姿が白鷺のように美しいからだと分かっていただけになりました。

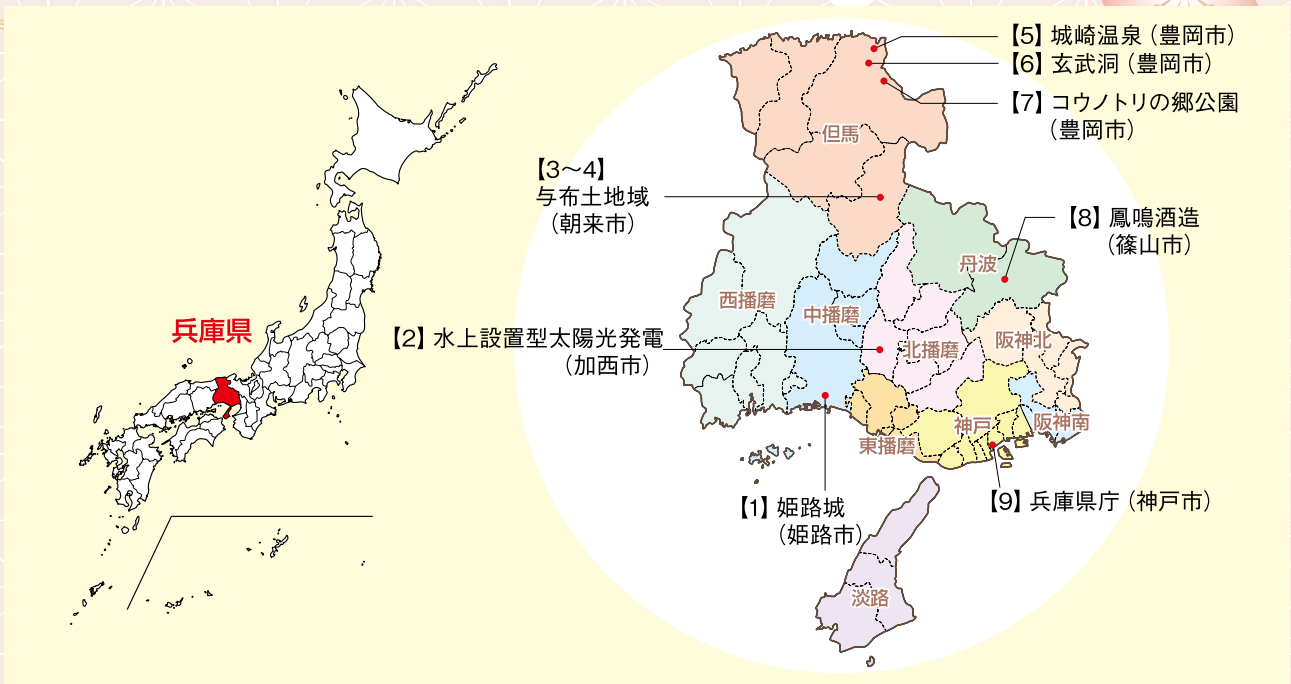
広中 姫路駅からも真正面にお城がよく見え、現地に近づくと、斜めから見た姿が特に華麗で、美しいたたずまいでした。お城の中の敷地もずいぶん広いですね。

井戸 そうですね。周辺も含めた巨大な建造物群なのです。本丸、二の丸、三の丸、それに西の丸の端には外周をめぐる百間廊下ともいわれる櫓群やぐらがあります。これはたいへん長大な建造物で、あれが残ったというのも非常に幸運なことです。

広中 明治になって壊されかけたと聞きましたが？

井戸 ええ、民間に払い下げられたんです。ところが当時は荒れた状態で、その民間の人が薪代にもならないといって国に返上したんです。その後、陸軍の兵営地となり、いくつかの建造物が取り壊されたのですが、たまたま文化財に造詣の深い中村重遠しげとという陸軍大佐がいて、この方が国に働きかけたことで保存されることになったのです。

広中 そういう人がいらっしやらなかったら、この世界遺産は今に残らなかったのですね。折々にそうした逸材、素晴らしい判断をした人が地域に存在したのでしょうね。



広中会長の視察先地図（数字は視察順）

井戸 太平洋戦争の時には、姫路の町も二度の空襲被害を受けています。大天守の最上階に焼夷弾が落ちたこともあったのですが、これがたまたま不発弾となり奇跡的に焼けなかった。こうした幸運もあって今の姿が残っているのです。

広中 このお城は、数々の幸運に守られているのですね。そういう幸運が伝わってくるのでしょうか。姫路駅からお城までを真っ直ぐつなぐ大通りを通して真正面に本丸が見えた時は感嘆しました。

井戸 姫路駅から城までのあの広い通りは、50m道路として今の石見利勝姫路市長のお父さんである石見元秀いのみもとひでさんが、市長をしていた時に整備されたもので、それを基に現在の城郭都市の玄関口らしい構造をつくることができました。

広中 駅前の様子も姫路城の大修復に合わせて新しくなったようですね。姫路は今では国内だけではなく外国からも大変な数の観光客が訪れているのではないですか？

井戸 ホテルが足りなくて困ってしまうほどです（笑）姫路にはいままでも一定のお客様が来られていたのですが、現在のような集中的な観光拠点にはなっていませんでしたからね。

再生可能エネルギーへのシフト

井戸 姫路城の後は、どちらをご覧になられたのですか？

広中 瀬戸内海側から日本海側に向け、兵庫県を

縦断しました。まず、加西市のため池に向かいました。（視察先2）今回新しい発見をしたのですが、兵庫県はため池が日本一多いそうですね。

井戸 はい。3万8,000カ所ほどになります。

広中 そのため池を有効利用したフロート式太陽光発電を見学させていただきました。ため池の水面にソーラーパネルを浮かべた発電設備というものを初めて拝見しましたが、これは面白い試みですね。

井戸 加西市の逆池さかさまいけですね。これは水上式のメガソーラーとしては世界最大規模になります。この発電施設を稼働させる前に別のところで事前に実験をして、まず水上では冷却効果があってソーラーの発電効率がよくなること、同時に池の生態系にも問題がないことを確認しました。さらに景観にも大きな影響を与えないということで始めたものです。

広中 逆池では水面の三分の一ほどがソーラーパネルで覆われていました。これは藻の異常発生を抑える二次的な効果もあるとうかがいました。藻が繁茂しすぎると、水中の酸素が欠乏して水が死んでしまいますからね。

ため池以外での太陽光発電の例はあるのですか？

井戸 はい。他にもダムの壁面にパネルを取り付けて発電する試みをしています。それから瓦の産地である淡路島では、太陽光パネルと一体型の平板状の瓦を開発してもらい普及に努めています。もう一つ、まだ開発中ですが、ビルの屋上につけられるよう踏んでも壊れないものを作るよう事業者

視察レポート①

視察1 世界文化遺産・国宝 「姫路城」

その優美な姿から「白鷺城」とも呼ばれる。関ヶ原の合戦の後、池田輝政が築城。平成27年3月、平成の大修理を終え、白漆喰総塗籠造りの鮮やかな姿に連日、大勢の観光客が訪れている。写真①は西の丸からみた大天守。(写真①②)



視察2 水上設置型太陽光発電

加西市の農地用ため池・逆池の水上に設置された約9,000枚の太陽光パネルを用いたメガソーラー施設。フロート式太陽光発電とも呼ばれ、出力約2.3MW、一般家庭820世帯の電力を賄う。水の冷却効果によって陸上設置型より発電効率が高く、高齢化する地元自治会に設置企業から借地料が入り、管理負担が減っている。兵庫県には約3万8,000カ所のため池があり、その有効利用としても注目されている。(写真③)



視察3 里山防災林の堰と木の柵 (朝来市与布土地域)

兵庫県では「県民緑税」を導入し、都市の緑化と、災害に強い森づくりを進めている。特に里山では、豪雨時に集落裏山の斜面が崩壊したり、大量の流木が激流に乗って甚大な被害をもたらすこともあるため、森林を整備したり、土砂や立木の流失を防ぐための堰や木の柵などの防災施設を設置したりしている。(写真④)



発破をかけたりしています。

広中 新エネルギーについて、いろいろなアイデアをお持ちなのですね。

井戸 それから淡路島の中腹などで風力発電もしています。ただし、山の稜線を侵さないようにしています。それこそ稜線は、先祖がずっと山並みの美しさを残してきたものですからね。このために、私どもは、環境保全のために稜線は適地として認めないという環境基準を作りました。

2020年までに100万kWの再生可能エネルギーの供給を増やすことを目標にしていたのですが、これらの取り組みの結果、すでに96万kW確保できています。ですから、新たな目標を作らねばならな

いと思っています。

■丹波・但馬の霧

広中 ところで昨夜は志賀直哉の短編『城の崎にて』で有名な城崎温泉に泊まりました。(視察先5) 風情があっていい温泉街ですね。宿泊した旅館の女湯も大変混んでいました。やはり女性客に人気なのでしょうか？

井戸 確かに女性客にも人気ですが、いま特にヨーロッパからのお客さんに人気があります。城崎温泉にはインバウンドの外国人客がこの5年間で10倍以上、1,800人が2万人以上に増えています。

広中 今日は城崎温泉でも快晴でしたが、朝のう

視察4 ^{よふど}与布土地域自治協議会の地域創生の取組

朝来市の与布土地域は50世帯ほどの小規模集落が10集落集まった「与布土地域自治協議会」のもと、強い結束力で、企業や他地域との連携交流や、廃校となった小学校を活かした再生可能エネルギーの導入、地域活性化に取り組む都市部からの移住者である「地域おこし協力隊」との協働など様々な取り組みを精力的に行い、地域創生のひとつのモデルとなっている。岡林協議会長は「交流事業によって与布土の魅力をアピールし与布土ファンを増やしたい」と語る。写真は協議会の経営する農家レストラン「^{ひやくしょうちや}百笑茶屋 ^{まきこり}喜古里」(写真⑤)



視察5 ^{きのさき}城崎温泉

兵庫県北部の名湯として有名。円山川の河口付近に注ぐ大^{おおたにがわ}谿川沿いに静かな温泉街が形成されている。木造三階建ての温泉宿と並んで、7つの外湯が点在し、そこを巡る湯治客の姿が城崎温泉特有の落ち着いた風情を醸し出している。(写真⑥)



視察6 ^{げんぶどう}山陰海岸ジオパーク「玄武洞」

平成22年に「世界ジオパーク」に認定された山陰海岸ジオパークの名所のひとつ。160万年ほど前の火山活動によって噴出したマグマが、冷えて固まる時に規則的な割れ目ができ、六角形の柱状の岩石群となり、その岩石を人が採掘したためできた洞窟。中国の四神にちなんで名付けられ、地質学でおなじみの玄武岩の命名も玄武洞に由来する。(写真⑦)



ちは霧に包まれていまして、それがまた美しかったですね。

井戸 丹波から但馬にかけては、霧の多発地帯なのです。特に秋は霧が多いですね。霧で視界が遮られ車の運転が危険になることもある一方で、霧は素晴らしい景色をもたらしてくれます。天空の城と言われる竹田城跡をご存知でしょうか？

広中 途中、車の中から山頂の城跡を見ました。竹田城跡は映画のロケ地にもなって有名ですし、ポスターを見ますと、雲の上に城跡が浮かんでいるように見えて幻想的です。

井戸 今では年間60万人の観光客が来られます。ただ、竹田城跡はそんなに多くの人を迎えられる

構造になっていません。城跡が壊れやすくなっていますので、修復対策も大変です(笑) なんとかして皆様に来ていただけるようにしています。

広中 山頂と聞くと道のりが大変に感じますが、竹田城跡までは車やバスで登れると聞きました。

井戸 そうですね。ゆっくり歩いてふもとから片道1時間ほどで着きます。竹田城跡の見ごろは、きれいな霧がかかる秋から初冬の頃になります。

霧が発生しやすい気候がこの土地の独特の産物も産みました。例えば丹波篠山の黒大豆や良質の日本酒をつくる米なども、こうした昼夜の気温差が大きい気象がもたらした恵みであり、古くからの酒蔵が今も活躍しています。

■人と自然との共生

広中 今回は竹田城跡には登りませんでしたが、玄武洞を見てまいりました。(視察先6) 大変きれいな割れ目が岩肌一面に整然と刻まれている様は、まさに自然の芸術でした。自然の不思議な力を見せつけられた思いがします。この玄武洞を含む「山陰海岸ジオパーク」は、「世界ジオパーク」に認定されているそうですね。

井戸 はい。このほど2回目の審査も受けて、継続して認定されました。ジオパークというものは、一度認定を受けたとしても取り消しになることがあります。4年ごとに再審査を受けて合格しないといけないのです。

山陰海岸ジオパークは、もともと日本海ができた時の地形が、構造的に残っている地質学的な意味で貴重なところですよ。それに加えてすぐ近くの「兵庫県立コウノトリの郷公園」のような、一度絶滅した動物の自然回帰を実現したところも含めて見どころとなっています。

広中 県立コウノトリの郷公園もうかがいました。(視察先7)

コウノトリ保護増殖センターで人工増殖をしていましたが、その施設の外にも、さらに近くの民家の屋根にもコウノトリがいました。これらはすでに施設から放鳥されて野生の中で生きているのですが、大きくて非常に美しい鳥ですね。

井戸 そうなんです。兵庫県は自然再生プロジェ



公益社団法人環境生活文化機構 広中 和歌子会長

クトに取り組んでおり、コウノトリの野生復帰もそのひとつです。

人工増殖したコウノトリを自然界に放鳥してから昨年で10年を迎えました。今では全国の空を80羽ほど飛んでおり、豊岡市を越えて広い範囲で野生となったコウノトリが確認できるようになりました。中には韓国で確認された例もあります。

平成17年の最初の放鳥の際には秋篠宮様ご夫妻にお越しいただき、ケージのふたを開けていただきました。あの時、コウノトリが本当に飛んでくれるか心配でしたね。実は、ちょっと工夫もしまして、3歩ほど歩いたら大きな溝があるところにケージを置きました。そうすると、コウノトリも落ちないように飛びあがるだろうと。お陰様で無事に飛んでくれました(笑) 続いて当時の文化庁長官だった河合^{はやお}隼雄先生と私が放鳥し、5羽すべてのコウノトリが無事に飛び立ちました。

■防災と安全のために

広中 当時の文化庁長官は河合先生でしたか。臨床心理学の権威ですが、お亡くなりになられて本当に残念です。

井戸 河合先生^{ささやま}の死は少し早過ぎましたね。先生は篠山の出身なんですよ。

広中 そうでしたか。私はかつて京都に住んでおりました。当時の京大の人文科学研究所には^{そうそう}錚々たる先生方がおられて、桑原武夫先生や河合隼雄先生も健在で、よくお話を伺いました。その時に感じたのですが、京都・大阪・神戸という文化圏には、東京とは違った独特のがありますね。

井戸 結局、東京圏というと同心円ですよ。基本的に地域色が似通っています。ところが関西は、京都・大阪・神戸・奈良といった地域ごとに一つひとつ異なる強い個性があります。これは良いことであり、困ったことでもあります。例えば防災という視点で見ますと、府県域を超えた対策が必要になっても従来の行政では対応できません。

そこで「関西広域連合」という日本最大の地方公共団体をつくりました。最近になって奈良県もそのメンバーに入ってくれましたので、これで関西は一つになりました。

広中 井戸知事は、関西広域連合の連合長もお務めでしたね。今は過度の東京一極集中になっていますので、ここはぜひがんばって関西から声を上げていただきたいものです。

井戸 ありがとうございます。首都直下型地震は

30年以内に起こる確率が70%もあります。南海トラフの大地震も30年以内に70%の発生確率だといえます。確率的には南海トラフと首都直下型は同じです。関西広域連合ではすでにこの対応に取り組む広域防災体制を検討しています。

広中 兵庫県は阪神・淡路大震災を経験しているから、大いにリーダーシップを発揮いただくことを期待しています。昨年は震災から20年という節目の年を迎えられましたね。井戸知事は、震災の時はどちらにいらしたのですか？

井戸 東京でした。当時は自治省、今の総務省で総務課長をしていました。その1年後に兵庫県の副知事になりました。私の生まれ故郷が西播磨の新宮町新宮という揖保川中流にある町なんです。ですから故郷の復興を手伝えと言われまして、嫌だとは言えませんね(笑)

広中 確かに(笑) それにしても震災の復興にご尽力なされたご経験、ご功績は大きいですね。

井戸 東日本大震災の時は、エリアが広域でしたから政府による復興庁ができましたが、阪神・淡路大震災の時は限られたエリアでしたので、県中心で復旧復興に当たりました。復興庁を設立させるような話がありましたが、国が応援できるところは特例制度などで応援をしてもらおうという仕掛けを作りました。ただ、復旧はさせても、それ以上の質的向上はさせないという原則があったのはネックでしたね。

広中 今朝は山陰側から瀬戸内海に向かって車で縦断、最後に高速道路のトンネルを抜けて神戸市内に出ますと、篠山までの風景とは一変した大都市の姿がポンと出てきました。やはり神戸はすばらしい大都市ですね。

井戸 確かに震災の復興で背の高いビルができたのは事実です。

広中 それにポートアイランドのような埋立地に、新しい超近代的な街もできています。

井戸 ポートアイランドをつくり、合わせて六甲アイランド、その後に西神中央という新しい街並みをつくっていきました。これは神戸のひとつの大きなエポックメイキングでした。

広中 結果的には、困難を克服してさらに立派な大都会になったように見受けられます。県としても大きな経済的負担を負われたと思いますが、それは今、どうなっているのですか？

井戸 東日本大震災は、あまりにも被害が広域に及んだので、ほとんど国費で復興にあたっていますが、

阪神・淡路大震災の時は地元負担がかなり大きかったです。およそ2兆3,000億円が県の負担となり、そのうち1兆3,000億円ほどを借金で賄いました。その借金は現在も5,300億円残っています。それを、これから20年ほどかけて減らしていく予定です。

広中 本当の意味での復興とはそれほどまでに時間のかかるものなのですね。

■地域創生の新しい試み

井戸 防災の面では、兵庫県では県民緑税を導入しています。県民税の均等割りの超過課税ですね。県民税を納める方は、1人800円、1企業ですと均等割額の1割。これで年間24億円ほどになります。これを財源に災害に強い森づくりと都市緑化を進めています。

広中 森づくりといえば、昨日伺った朝来市の与布土地域では、山の斜面に木の柵や谷に堰を作っていました。(視察先3)

井戸 それも「災害に強い森づくり」の一環です。大水害が起きた時に立木が流されてきます。これは山の管理が不十分だからなのです。そこで山の管理を徹底し、さらに木の柵を立てて土砂止めをしています。

「都市緑化」の方は、壁面緑化でも屋上緑化でもいいし、あるいは学校の校庭の緑化も進めています。県民緑税というのは、こうした目的に使われています。

広中 与布土地域は小さな集落でしたが、そこに



兵庫県 井戸 敏三知事

視察レポート②

視察7 兵庫県立コウノトリの郷公園

国の特別天然記念物コウノトリは、自然環境の悪化により数を減らし、保護増殖センターが設立されたものの国内では一度絶滅した。20年

以上にもわたる研究の末、人工繁殖に成功し、平成17年には最初の試験放鳥が開始された。今では自然の中での繁殖が進み、全国41府県で飛来が確認されるまでになった。番^{つが}いを得ると生涯ペアを変えないという、オシドリ夫



婦ならぬ情の深さを持ち、羽を広げると2mにもなる巨体だが、首をすっと伸ばして空を舞う姿は優美の一言。(写真⑧⑨)



視察8 ささやま 篠山市の鳳鳴酒造「ほろ酔い城下蔵」

平成27年、文化庁の「日本遺産」に「丹波篠山デカンシヨ節一民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶」が認定された。鳳鳴酒造は江戸時代から続く酒蔵で、その民謡の中で歌い継がれている篠山の文化財の一つ。見学施設「ほろ酔い城下蔵」では、江戸期に実際に使われていた古い道具が展示されていて、酒造りの製造工程を見ることができる。(写真⑩)



都会から若い人たちが移り住んできて、土地の人たちと一緒に地域活性化に知恵を出していました。

井戸 朝来市では、小学校の学区単位くらいの自治会（地域自治協議会）がしっかりしているんですね。朝来市自身が地域自治協議会に地方自治包括交付金を出しています。それも個別事業で補助するのではなく、人口等に応じて500万～1,000万円ほど出し、使い方は地域自治協議会に任せています。与布土地域自治協議会では「喜古里」という農家レストランをつくったり、いろいろな試みに取り組んでいます。(視察先4)

広中 喜古里では「コウノトリ育むお米」というブランドのお米が売られていました。

井戸 かつてコウノトリを絶滅させた農薬に汚染された環境を再生させ、現在は無農薬、あるいは減農薬ですべて栽培されています。つまりコウノトリが元気に飛び交うほどの環境で栽培されたことが、安全で安心できる食材であることを保証している

わけです。環境適合型社会と呼んでいますが、これも兵庫県の一つの目標なのです。

広中 人と自然とが共生する社会を築いていくことで、地域の活力、創生にもつなげようとする試みなのです。今回は本当に素晴らしいところを数々拝見させていただき、ありがとうございました。

プロフィール

兵庫県知事 **井戸 敏三** (いど としぞう)

昭和20年、兵庫県たつの市新宮町生まれ。昭和43年、東京大学法学部卒業後、自治省入省。鳥取県、佐賀県、宮城県、静岡県、国土庁土地局、自治省税務局を経て、運輸省航空局、自治省行政局、財政局、大臣官房各課長を経て自治大臣官房審議官。平成8年、兵庫県副知事。平成13年から兵庫県知事、現在4期目。平成22年から関西広域連合長、現在3期目。

エシカルの原点を、伝統工芸世界に見る

ファッションジャーナリスト 生駒 芳子 氏

エシカルという言葉が一人歩きして、トレンドワードのように響いていることに、ちょっと違和感を持っている。これでは、いままでの“トレンド＝儲かる”という図式と変わらないのではないかな？ そんな気すらしている。

もちろん、一つの産業やジャンルが隆盛し、定着していく過程では、多くのビジネスモデルのトライアンドエラーを積み重ねなければ、前進できないということは知りつつも、本質的な流れは大切にしていきたい。そんな気持ちも強くなっている。

2000年以降、ファッションの道筋に見える新たな流れとして「エシカル・ファッション」を追いかけた私の目に、いま、とても重要にうつっているのが、伝統工芸の世界だ。

素材は自然由来のもの、手作業による丁寧な製造、ライフスタイルの中で培われてきたデザインなどなど。とりわけ日本の場合、伝統工芸の世界は「生活の中に溶け込む芸術」という形で進化を続けてきた。これはまさに「用の美」の真髄。人々の生活に寄り添うようにして、伝統工芸の世界は進化し続けてきたのだ。オーガニック、ロハス、エコロジーといった要素は元より、伝統工芸の世界のキーエレメントといえるのだ。

● 伝統工芸との出会い

長らくファッション・トレンドを追い続けてきた私が、伝統工芸と出会ったのは、いまから5年前のこと。金沢のファッションコンクールの審査委員長として呼ばれて金沢に出かけたときのことだ。それまでほとんど伝統の世界とは縁がなく、流行を発信するミラノ・パリに出かけるばかりだったので、伝統工芸に関しては、ほとんど「外国人レベル」の知識しかなかった。

そんな私に、「ぜひとも金沢の伝統工芸を見ていただきたい。生駒さんのファッションのチャンネル、グローバルな見識で、ぜひなんらかのアドバイスをいただきたい」という熱心な働きかけがあって、審査会のあと、3カ所を訪ねた。

まずは、象嵌そうがんの工房へ。金属に金属をはめこんで、美しい模様を描き出す象嵌は、まさに繊細な職人技が生み出す美意識の極みの世界。訪れた象嵌のギャラリーには、象嵌作家によって手がけられた美しい作品が並んでいて、まさにそのクオリティは、海外のラグジュアリーブランドのレベルと並ぶものに思えた。

ところが、作家に話を聞くと、「いまではすっかり販路がありません。後継者問題もあります。あと、どのようなものを作っていったらよいのか、まったく検討もつきません」という声が聞かれた。

極上のクオリティを生み出す工房から、こんな悲痛な叫び声ともいうべき声が聞こえてきたことは、私にとってはショックな出来事だった。

しかし、この叫びは、ここ一カ所のものではなかった。次に訪れた工房でも、まったく同様のことが起こったのだ。美しい加賀友禅の着物の工房でも、着物にほどこす美しい刺繍世界「加賀繡ぬい」の工房でも、皆さんが異口同音に「販路が無い、未来が無い」と声を揃え、未来を憂えていた。

● ラグジュアリーブランドとの出会い

金沢での伝統工芸との出会いは、私に大きな転機をもたらした。美しい日本の匠の技を目にし、しかも彼らの叫び声を聞いて、まさにその瞬間、目からうろこが落ちるような体験をしたのだ。「自分たちの足元にこそ、宝が眠っている！」と、コロンブスが大陸発見したくらいの規模の「発見気分」が、私の中で眠っていた日本人としてのDNAに大きく揺さぶりをかけたのだ。

わくわくするような気持ちを抱えて東京に戻って来ると、ほどなく一本の電話連絡が入った。それはイタリアのラグジュアリーブランドの日本支社長からの電話だった。「我々のクラフツマンシップの精神を日本でプロモートしたいので、伝統工芸の職人とのコラボレーション企画をコーディネートしてもらえないか？」という伝統世界を見て帰ってきたばかりの私にとっては、運命的な内容だった。

なんとというタイミング！ たった今、金沢で伝統工芸に出会って、感動して帰ってきたばかりではないか。その興奮も冷めないうちに、こんな依頼がくるなんて！ 一瞬、啞然とした気持ちに包まれつつ、棚からぼた餅？ こんなチャンスはない！ と思い立ち、すぐさま社長に金沢の伝統工芸とのコラボレーションを提案してみた。

あとで考えれば、これこそが私の人生をシフトさせたタイミングだった。提案した私に、一も二もなく「それでは、すぐに金沢に行きましょう！」と答えてくれた社長の即断即決力にも感謝だ。

そしてその一週間後、我々はふたたび金沢を訪ね、象嵌、加賀友禅、加賀繻いの工房を訪ねていた。そしてその現場で、すぐさま象嵌と加賀縫いのコラボレーションが決まった。

● クールジャパンの追い風

これが、2010年の秋のこと。その頃、政府の取り組みとして始まっていたクールジャパンの官民有識者会議に出席するようになっていた私は、ますます我々日本人自身が日本文化の価値を認め、大切にしていかなければならないという思いに包まれていた。

そして2011年3月11日、東日本大震災を経験。津波の風景、そして多くの方々が犠牲になられたニュースを目にして、日本人としてのDNAはさらに呼び覚まされた。

「いまこそ、日本の文化を、私達が未来に繋げねば」と。

震災後、間もなく、進んでいた我々のプロジェクト——海外ラグジュアリーブランド×日本の伝統工芸——は、大手デパートで発表されることとなった。象嵌の職人さんを東京に呼び寄せ、イタリアブランドの職人と肩を並べて、職人技を披露するという催しは大変盛況で、コラボレーションアイテムも好評の内に完売した。

これがきっかけとなり、計3回、金沢の加賀繻いや会津若松の漆作家を交えて、ラグジュアリーブランドとコラボレーションを展開することとなった。

こうしていきなり始まった、伝統工芸世界とのコラボレーションの火を、なんとか前進させたいと考え、2011年夏には、表参道で展覧会を自ら企画・開催。「FUTURE TRADITION WAO」と題して、

ラグジュアリーブランドとのコラボレーションから、伝統世界で開拓的な表現をする作家さんたちのモダン・アイテムまで紹介。

“WAO (ワオ)”とは、“WA=日本の和世界”“O=生まれる=日本が再生する”という気持ちを込めた造語だ。また、ものとの出会いに感動がなくなりつつある今、ふたたび「こんな素敵なのがあったんだ！」と感動していただくWOWの意味も重ねた。私の伝統工芸を未来に繋ぐプロジェクトは、こうしてスタートしたのだ。

● いまや、伝統工芸の大波が！

それから4年、いまや伝統工芸世界には、大波が押し寄せている。クールジャパンブームに、オリンピック・パラリンピック景気が追い打ちをかけ、それこそビジネスだけが目的で参入する大手企業も続出しはじめ、マーケット全体で「JAPAN」ラブコールが鳴り響いているという状況だ。

私の企画しているWAOは、クールジャパン事業として、パリ・ニューヨークで展示会を開催し、大好評をいただき確かな手応えを得たのち、東京では大手デパートでのポップアップショップ、オンライン販売が始まっている。

現在は、さらにこの活動を未来に繋げるために、一般社団法人「FUTURADITION WAO (フュートラディション ワオ)」の設立と、サステナブルに販売を展開するプラットフォーム作りに着手している。

● デザインが決め手

伝統工芸世界のマーケットの広がりを見ると、鍵となるのは、なによりデザインだ。デザイン革新こそが、伝統世界を未来に繋ぐ重要な要素だとひしひしと感じている。

自然と寄り添い、ライフスタイルの中から育まれてきた伝統工芸の多くは、日本人が着物を着て、日本家屋に暮らしていたときに進化してきた。

歴史的に考えると、第二次世界大戦後に、その進化が止まってしまっている。戦後、モダンなマンション暮らしが普及し、その空間の中では、伝統工芸が古びた印象を放つようになってしまった。(いままた、その流れが多少変わって、昔懐かしいデザインが、若い世代には人気を得ているという現

象もあるが)

時代とともに、人々が求め、快適と感じるデザインは、変わっていく。とりわけ、ここ2、3年のあいだのスマートフォンの普及により、全世界の人々が、あの小さなスマホの画面を頻繁に眺めることで「デザインシャワー」を浴びることとなってしまっている。アプリやスマホ画面の美しいデザインを毎日見ること、実は知らぬ間に、一般の人々のデザインに関する目は肥えてきている。

それだけに、伝統工芸のアイテムも、素材や作られ方、歴史がどれだけ素晴らしくても、見た目の完成度、洗練度がないと販売には繋がりにくい時代になった。逆に言えば、見た目のデザインに魅力があれば、販売に繋がりがやすいともいえる。

● 伝統を未来につなぐ鍵は「革新」

ちなみに、私が注目したのは、たとえばピンクやブルーなど従来にはないカラフルな色展開をほどこした南武鉄器たち。また、漆や蒔絵、箔を生かしたアクセサリシリーズ。真珠のジュエリーも、遊び心のあるデザインのものを選んでるし、西陣織を使ったバッグなども新しい表現として、積極的に紹介している。

京都の西陣織が、いま、ラグジュアリーブランドの世界各地のブティックの壁を飾っているということは、ご存知だろうか？ なぜそれが可能になったか？

答えは、織り幅の拡張、である。帯幅でしか織ってこなかった西陣織の世界で、30代の後継者が発案し、改良された織り機で織られた1m50cm幅の西陣織は、パリの展示会でたちまち建築家を魅了し、その場でトップブランドの壁を飾ることが決定されたという。着物のための織物の限界は、その織り幅にある。その限界を超えることで、グローバルなステージと繋がりが得たということだ。

私がファッションエディターとして、海外のラグジュアリーブランドから学んだことの一つは、伝統には常に革新が必要であるということだ。革新をしないしていると、伝統はいつしか、ただの古い世界に留まってしまう。

和紙作家の堀木エリ子さんは「今起こす革新こそが、未来の伝統になるのです」と力強く断言する。私はこの言葉に大変感動し、そしてそのスピリットは、グローバルビジネスで成功を納めている多くの

欧米のラグジュアリーブランドの精神にも繋がっていると感じている。

ルイ・ヴィトンというフランスの伝統ブランドが、2000年以降、村上隆、草間彌生という日本人作家ともコラボして、モノグラムという伝統柄を進化させたことは記憶に新しい。それはチャレンジを常にしてこそ、ブランドの魅力はフレッシュに保たれるということの証明だ。

● 日本の文化が世界を救う！

これからのミッションは、日本文化を世界に広め、そのスピリットを伝えていくことだと考えている。自然と共生し、調和を重んじ、世の安寧を祈ってきた日本人の精神性を、文化を通して世界に伝えていくこと。それこそが、いまこの時代を生きる我々の果たすべき使命ではないかと感じている。

明治維新が日本の近代文明の夜明けだとするならば、21世紀のいま我々が迎えているのは、第二の維新＝文化維新とも言うべき時代ではないか。戦後70年間、ほぼ放置されてきた日本の文化行政が、いまこそ甦り、新たな力をつけ、皆で力を合わせて前進させるときではないか。

日本人にとっての最大のエシカルは、自国の伝統文化を見直し、その価値を認め、付加価値を高めるブランディングをほどこすことで、世界発進することだと確信している。エコもエシカルも、そのスピリットが足元にごっそり眠っているこの国の文化こそが、エシカルの宝の山といえよう。



アンシャンテ・ジャポンの南部鉄器

飛べない鳥の楽園

立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 教授 萩原 なつ子氏

日本で唯一の飛べない鳥、天然記念物のヤンバルクイナを探しに、沖縄本島最北端の^{くにがみぞん}国頭村の森を訪ねた。山原に暮らす、水鶏ヤンバルクイナがいるこの森は、別名「ブロッコリーの森」と呼ばれていて、世界中でここにしか生息していないヤンバルクイナやノグチゲラの他、多くの固有種や希少種が生育・生息している。「ブロッコリーの森」とは何とも可愛らしい表現だが、宿泊施設のベランダから眼下に広がる森をみていると、確かに色といい、木の密集度といい、だんだん「ブロッコリー」っぽく見えてくるから不思議である。

ヤンバルクイナは100年以上前にハブ退治のために放たれたマングースやネコに襲われて数が減少した。天敵がいらないからと安心して(?)飛べない鳥へと進化したヤンバルクイナの前に、突如現れたマングース。人間に連れてこられただけのマングースに罪はないが、ヤンバルクイナの保護のために環境省や沖縄県が捕獲を進め、地元のNPOも保護活動を頑張っている。そのおかげで少しずつ増えてはいるようだが、そうそう簡単に見られるものではないらしい。ただ、9月初旬は比較的チャンスがあるということで、探鳥仲間のツアーに加えてもらったのだ。



ご存知のように、探鳥する人々の朝は、超！早い。だから前日の夜はもう9時くらいに就寝してしまう。早朝5時、眠い目をこすりながら身支度を整え、待ち合わせの場所へ。外は真っ暗。こんな中でヤンバルクイナが見つけれられるのかしら、と半信半疑で車に乗り込んだ。

しばらく走ると車が静かに止まった。「あの木の上!」。どこ?どこ?と言いながら、仲間が指差す方向を見る。枯れ木の先端にヤンバルクイナらしきシルエットが! どうも眠っているらしい。隣の木にもう一羽。仲間が「ヤンバルクイナは一本足で寝るんだよ」と教えてくれた。へ〜、よく落ちないな、と感心する一方で、ちょっと待って、飛べない鳥のはずなのに、なぜ木の上に? ハブなどの天敵から身を守るために、每晚木に登って眠るそうだが、果たしてどうやって登るのだろうか。その瞬間を見た人は今回の仲間にはいなかった。

ヤンバルクイナがよく出没する大木があるというので移動した。すると軽トラが止まっていて、その横にいた地元のおじさんらしき人が「いるよ!」と教えてくれた。空がようやく白みはじめてきたその時、突然、ケケケケケケッ…と甲高い鳴き声が静寂を破った。ヤンバルクイナのお目覚めだ! 目の前に2羽のヤンバルクイナが姿を現した。さあ、ここから実に面白い光景が展開された。直ぐにでも降りてくるのだろうと思ったら、2羽ともなかなか地上に降りてこないのである。むしろ腰が引けていて、降りられないといった方が確かな表現だろう。とっさに動画で撮影を開始した。下を覗き込みながら、木の枝を何度も何度も行ったり来たりしながら降りるタイミングを計っている。すると、バサッバサバサバサ! ドサッ! 飛び降りた! いや、落ちた(笑) なるほど、本当に飛べない鳥なんだ! ビギナーズラック! 歩いている姿を見ることはできなかったが、いつかブロッコリーの森を強い足で駆け巡るヤンバルクイナに巡り合いたいものだ。ヤンバルクイナよ、永遠にあれ!

エコとユニフォームが進む道

ダイセン株式会社 記者 富永 周也氏

ユニフォームメーカーの2016年春夏商品が2月に発売されます。エコロジーやリサイクルを前面にしたものは多くありませんが、実際には環境ラベルを付けたウェアは多数流通しています。環境負荷ができるだけ少ないものを選んで購入する「グリーン購入」が制度化されて15年。ビジネスユニフォームの世界でリサイクル対応は既に標準となっていると感じます。素材メーカーから流通、関係団体などの努力の賜物といえるでしょう。

一方、「あたりまえ」になることで、当初の目的がわかりにくくなる懸念もあります。素材の調達、生産段階の省エネ化、温室効果ガスの削減、リデュース、リユース、リサイクル。ユニフォームが作られ、ユーザーの手に届き、着用されて再生されるまでには幾多の工程とコストがかかっています。これらの活動が裏方に引っ込んでしまうのは、もったいない。製品の価値に転嫁できれば良いのですが、「地球に優しい」といった抽象的な話ではビジネスレベルで通用しないのが現実です。そんな思いで取材をしていると、いくつかのヒントが見つかりました。

まず、リバーズプロジェクトによる「全日本制服委員会」。俳優の伊勢谷友介さんが代表を務める同社は衣食住をはじめ、さまざまな分野で社会性の高い事業を展開しています。全日本制服委員会は「2020年までに1,000万人の雇用制服を環境配慮型へと変えていく」と高い目標を掲げたプロジェクト。スタートした2014年にこの欄でも紹介しましたが、第四弾として総合食品卸を行う西原商会（鹿児島県鹿児島市）の営業配送スタッフの制服リニューアルをプロデュースしました。デザインはブルゾン型からジャケットにスタイリッシュに刷新、素材は再生ポリエステル100%の生地を使用しています。

さらに、これまで着用してきたブルゾンとシャツは同委員会のメンバーに加わったエコログ・リサイクリング・ジャパンのシステムで回収、再生プラスチックの箸にして鹿児島県内の地域の子どもたちに還元するところまで取り組みを広げています。伊勢谷さんをはじめ映画製作に関わったクリエーターが立ち上げた同社だけにオリジナルの映像によるメッセージングも巧みです。着る、食べ

るという日常の行為を組み合わせることで、プロジェクトの発信力は強まるでしょう。次の展開が注目されます。

もうひとつは「古着を燃料に走るスーパーカー」。SF映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」で一躍有名になった「デロリアン」を走らせるイベントが昨年10月、映画ファンを集め都内で開催されました。仕掛け人は、古着からバイオエタノールを作り出す技術を持つ日本環境設計（東京都千代田区）。カジュアルブランドや百貨店がメンバーに名を連ねる衣類回収事業「FUKU-FUKUプロジェクト」の事務局でもあります。リサイクルで課題となる回収は、協力企業の店頭や郵送などコンシューマーが行う点が特徴です。

イベントには日本環境設計の岩元美智彦社長が登場。「映画の第1作でゴミを燃料に動くデロリアンを観たのが起業のきっかけ。今日、夢に近づけた」と熱く語り、会場を沸かせました。

製造業では「モノづくりからコトづくりへ」という言葉が盛んに使われます。供給過剰な市場では製品単体での差別化が難しくなっているため、最終ユーザーと価値観を共有できるようなコンセプトやストーリーを打ち出すという方策です。繊維リサイクルに取り組む企業は高い技術力と実績を持っています。事業の意義を最終ユーザーに伝え、巻き込んでいく「コトづくり」が、リサイクルの世界でも必要になってきているのではないのでしょうか。



「ゴミを資源に」回収した衣類を燃料に走るデロリアンの前に、熱弁をふるう岩元社長

「もったいない」活かし “潤感型”社会形成へ

株式会社トベ商事 代表取締役社長 戸部 昇氏



株式会社トベ商事は、廃棄物処理・リサイクル事業を柱とする優良企業です。4代目に当たる代表取締役社長の戸部昇氏は、独特の先見性・洞察力・実行力を発揮しながら、業界の底上げにも尽力。昨年、東京都から功労者表彰（産業振興功労賞）を授与されました。今後も「もったいない」精神を活かし“潤感型”社会の形成に向け「ふんころがし」のように努力していく決意です。

——このたびは、東京都功労者表彰のご受賞おめでとうございます。

ありがとうございます。このような榮譽ある賞をいただき大変嬉しく思っています。

——初めに主な事業内容をお聞かせください。

当社は空きびんの回収・販売からスタートし、リターナルびんの洗浄販売、空き缶やペットボトル、発砲スチール・トレーのリサイクル、一般廃棄物の収集運搬、産業廃棄物の収集運搬に中間処理など広範囲に渡っています。

——創業時からの大まかな歩みを教えてください。

創業は、初代・戸部初五郎が、1898年に空きびんの回収・販売を行う戸部商店を興したのが始まりです。もともと初代は千葉県の流山の出身で、豊屋奉公を経て、米店を興したのですが、米相場に手を出して失敗しました。わずかに残った米を活かして、東京の田端で煎餅を焼いて提供する茶店を開きました。

——空きびんの回収・販売を始めたのはその後ですね。

初代は暇を見て、しばしば釣りに出かけたそう

です。そこで親しくなった酒蔵のご隠居に、これからはびんの時代と教えられたといいます。その後、茶店の前を廃品回収の屑屋さんが引いて通る大八車の中に、鉄くずや骨とう品、古着などに混じって、びんを見つけて試しに買い取ってみたいそうです。当時はまだびんが一般的ではなく、売り先にもなかったため、屑屋さんも購入を快諾してくれたそうです。

これをきっかけにびんを買ってくれる茶店があると屑屋さんの仲間内で評判になり、次々とびんが集まり出しました。売り先もないままびんは溜まり、一時は縁の下だけでなく家中を埋めたそうです。そんな時、評判をきいた大手の酒問屋から注文があり、大儲けしたそうです。こうして空きびんの回収・販売業をはじめると至りました。折しも明治26年は国産ビールが誕生し、びんの需要が広がる矢先でもありました。

——やがて太平洋戦争に飲み込まれることになります。

戦中戦後のしばらくは、びんが思うように集まらないため、様々な資源を扱うようになりました。自分で建場^{たてば}(※)を開き、屑屋さんにリヤカーを貸し、回収したものを買い上げて問屋に納めたのです。多い時には100台を超すリヤカーがあって、その人集めの秘訣は仕事上がりに焼酎を一杯つけることだったそうです(笑)

再びびんを取り扱いだしたのは1948年に、三代目が合資会社戸部商事を興してからです。しかし、当時はまだびんは少なく、一升びんで70円



東京都功労者表彰受賞祝賀会の様子

※建場^{たてば}:屑屋さんが集めてきた不用品(資源物)を買取る問屋。

もしていたそうです。貴重品だったことが想像できます。

——**びんが集まらない状況では、厳しかったでしょうね。**

そんな時、当時の気象庁からびんを片付ける依頼がありました。官舎へ行くと山ほどのびんが転がっていました。何艘もの観測船から降ろしたものが溜まっていたそうです。すべて引き取って問屋に売り、ここでも大儲けしたそうです。これが戦後の商売の出発点になりました。

——**経済が復興し、びんを巡る環境はめまぐるしく変化していったそうですね。**

屑屋さんもびんなど不用品の回収で苦勞をするより、工場で働いたほうが楽で安定していると考えようになったのです。屑屋さんが減って、びんの回収はさらに難しくなりました。1960年頃には酒の小売店にびんが集まるようになり取引先も変わっていきました。

1969年頃から扱いやすいびんの製造が本格化したことに伴い、新品のびんの供給量が増え、リターナルびんの値段が下がりだしました。そこで洗浄という付加価値を付けて売り出したのです。それまで店の軒先で1本1本手洗いしていた作業がなくなるのですから、洗ったびんはよく売れました。

——**容器の多様化がリターナルびん需要を圧迫したそうですね。**

1995年頃になると容器革命が始まり、スチール・アルミ缶、ペットボトル、紙パックと次々に新型が登場しました。このあおりでリターナルびんは減少する一方となり危機感を抱きました。しかし、何回も繰り返して使えるこのびんのシステムは、循環型社会の形成からも是非残したいと必死でした。とにかく生き残るにはと、使い捨てびん、アルミ缶など資源になる容器は何でも扱うよう事業を拡大しました。

1990年に同業の有志10社と、株式会社エリックスを設立し、独自のリユースびんシステムを開発しました。これを機にリユースの提案を積極的に行い、幾つかの生協や一部の某大手居酒屋チェーンとの間で現在も取り組みが続いています。

——**この頃、びん・缶のリサイクルも義務化されましたね。**

当時、まだびん・缶はゴミとして捨てられていましたが、都内にある一定の事業者にびん・缶のリサイクルを求める条例が制定されました。そこで、今後はペットボトルやびんなど他の廃棄物でも同様にルール化されるだろうと考え、事業所から出てくるびん・缶なども扱うことにしたのです。

既存の産廃業者は事業者から処理費用を受け取っていましたが、それまで私どもは、びんを買い取り、販売していました。この時、びんを買うのではなく、逆にリサイクル技術を売って処理費をいただけるのではないかと考え、営業してみたところ他社より安いと好感触でした。

ところが、びん業者の方々にその話をしても、お金をもらってリサイクルするなんてただのゴミ屋じゃないか。仕入れ値と売値の差額の儲けでやりくりするものだという会社としての誇りや業態としての固定観念があったのです。

——**時代を先読みして、いち早く一步を踏み出されたのですね。**

その後、東京23区の一般廃棄物（びん・缶）にも資源再生が義務化されました。しかし、古紙の集団回収はあっても、空き缶や小さなびんのリサイクルは誰も扱っていませんでした。そこで、当社はできますよと手を挙げたわけです。

さて、実際にリサイクルするなら一企業としてより、地域の組合でやったほうが事業化しやすい。そこで、株式会社エリックスを組合化して、東京包装容器リサイクル協同組合として業界一丸となってあたりました。

その際、リサイクルをするなら仕分けやプレスを行う工場が必要になり、それに伴い工場認可や産業廃棄物の許可も必要になってきました。私どもはすでに取り組んでおりましたから皆さんにそのノウハウを提供したのです。

——**自社のみならず他社を巻きこんだ資源循環システムの構築への功績が認められ、このたびのご受賞に結びついたのでしたね。**

自分としては何の実績もないのに有り難い気持ちです。組合の方が推薦に動いてくださったお陰と感謝しています。多少なりともお役に立てられたのかなと思っています。

——**労務の面では、障害を持った方の雇用にも努力されていますね。**

30年以上も前になります。近所に障害を抱えながらも、元気な子がいました。その姿を見た当時の社長から彼のような障害者を雇用してみたらどうかと意見がありました。当社は自治体の仕事も多く、その費用は税金で賄われています。それを社会へ還元したいと考えたのです。

——**採用なさっていかがでしたか？**

最初は戸惑いや心配がありました。受け入れる側の私たちも障害者とどのように接したらいいのか分からない。彼らもどのように働いたらいいのか分からない。でも半年ぐらい経って現場に慣れ

ると健常者と同じように働けるようになったのです。現在、従業員140人のうち、障害者は44人です。最も多い時には雇用率が53%を超えてました。

私達は、彼らをサポーターと呼んでいます。

——環境も人も大事になさっているのですね。

廃棄物から資源を生み出す当社は、動物達が落とした糞を掃除し、他人の気づかないところで活躍する「ふんころがし」に通じるところがあります。ふんころがしのように地道に、ヒューマンパワーで廃棄物の一つひとつを丁寧^{よみがえ}に扱い、甦らせ、潤いを感じる社会づくりを目指しています。

——現在はどのような課題がありますか。

社会が変化するスピードは、ますます速くなっています。容器、包装材もどんどん変わり、紙パックとプラスチック素材が一体となって解体できないなど3Rに対応できない容器すら現れました。消費者の利便性だけに目がいき、最終処理を無視したような製品です。

ニーズの変化とともに技術革新が進む一方で、技術革新によって新しいニーズが生まれる。当た

り前のことですが、廃棄物処理業を担う我々にも製造段階での情報がないと処理技術もイノベーションに対応できません。

——環境生活文化機構に対する期待や要望をお聞かせください。

私たちのような静脈産業と川上に位置する製造業など動脈産業とは、もっと密接な意思疎通が必要です。その場づくりをお願いできればと思います。びんの業界に限っていえば、静脈と動脈産業の接触は、多少あります。しかし、酒蔵業や流通業の方との交流はほとんどありません。何らかの形で考慮して貰えればと期待しています。

(記・所 昌平)

株式会社トベ商事概要

創業	1898(明治26)年
本社所在地	東京都北区王子5-10-1
資本金	500万円
従業員	140名
年商額	20億円

事務局だより

里山体験活動・地域間交流会の開催

平成27年10月4日、東京都八王子市高尾において、東京都と福島県の子どもの地域間交流会「高尾の里山で会いましょう」を開催しました。

当日は、東京と福島あわせて約20名の小学生が参加し、高尾山に生息する植物や生き物について教わりながら山歩きをしました。その後、新聞紙と間伐材^{はし}によるたき火おこし、間伐材を使ったMY箸づくりを行い、作った箸を使ってお昼にお弁当と地元の食材を使った芋煮を食べました。参



加した子どもたちからは「なかなかできない体験をして嬉しかった」「たくさんの人と交流して楽しかった」などの声をいただきました。

今後も小学生を対象に、下記日程で高尾地域での里山体験活動を予定しております。無料でご参加いただけますので、興味のある方はぜひ事務局までお問い合わせください。

■1月24日(日) ■2月27日(日)
■3月26日(土)



※この活動は平成27年度地球環境基金の助成を受けて実施しています。

季刊 エルコレージャー vol.65

発行者：公益社団法人 環境生活文化機構 発行日：2016年1月1日 〒105-0003 東京都港区西新橋1丁目20番10号 サンライズ山西ビル6F
TEL：03-5511-7331 FAX：03-5511-7336 http://www.elco.or.jp E-mail:elco.inc@trust.ocn.ne.jp